

東北応援ツアー（岩手県コース）に参加して

‘79 産業社会学部 卒

高山 哲彦

この度は、東北応援ツアーに参加させていただき、ありがとうございました。

友人、知人が次々と東北に足を運ぶ中、私はなかなかタイミングが合わず、行けずじまいでしたが、この企画でやっと東北に来ることができました。

一日目、大槌町にバスが入ったとき、被災した場所は、ずっと、ずうっと草っ原でした。

「あれ、復興って、どうなってんだろ？」と感じました。

その夜、岩手県校友の方々から、東京オリンピック決定に対する、静かな怒りを感じとりました。

「建設業者が東京へ行ってしまった」

「建設資材が高騰して困っている」

「一人の大工さんが五軒の家を担当してんだから、満足な家が建つ筈がねえ」

:

はたして、6年後の2020年、世界からオリンピックに集まってくれた人々に、「どうぞ、復興した東北を見て行って下さい」と言えるのでしょうか？ 不安です。

二日目に、陸前高田市に入ったときは、ア然としました。一言も声が出ませんでした。

そこに町はなく、被災モニュメントとして残っている、数か所の建物以外は何もない、いや、海拔1mの陸前高田市の市街地を、高台にするための、かさ上げ工事が始まっているため、広大な土地に、おびただしい土が積み上げられているのです。

山を削り、その削った土を直接、海岸沿いの市街地に運ぶため、山から長い長いベルトコンベアー（総長3km）があちこちに伸びており、それがとても異質な物に思えました。その光景を見た時の気持ちをうまく表現することができません。

陸前高田市の震災語り部「コハルさん」は、今年は涙を流さずに、震災状況をお話しして下さいました。昨年までは、途中でどうしても涙が流れ出してしまったそうです（コハルさんは、お友達を大勢亡くされ、そして親友はいまだに行方不明だそうです）

それでもコハルさんは、みなさんの援助に感謝の言葉を述べられました。それは、岩手県校友会のみなさんも同じです。私は頭が下がるばかりでした。

バスガイドさんが「津波避難の三原則」を教えてくださいました。

1. 想定にとられるな！

⇒ 自然現象として、あらゆる事態が起こる

2. 最善を尽くせ！

⇒ その状況下で、できる限りの行動をとる

3. 率先避難者たれ！

⇒ 集団心理が働き、多くの人を救う

これは地元の「津波てんでんこ、てんでんばらばら」という言葉を徹底させたものだそうです。

釜石市の震災語り部さんから「津波てんでんこ、てんでんばらばら」とは

「自分の命だけが助かることを考える利己主義からの単独行動を意味するのではなく、お互いにお互いが自分の命に責任を持って行動するという、それぞれの責任感が絆となった信頼関係からの単独行動」であると教えてもらいました（語り部さんの表現は、もちっとやわらかいものでしたけど・・・）

仮設住宅には、今も4500人の方が暮らしておられるそうです。仮設住宅は2年間の生活を目途に建てられているので、ひどいところは、もう土台が腐ってきているそうです。

狭いところにじっとしていると「生活不活発病」になり、心は、さらに悲しみの淵の中に沈んでいってしまいます。

岩手県校友会の鈴木さんがおっしゃっていたように

「悩むより、動いたほうがいい！！」

外に出て、いろんな人とおしゃべりしてほしいです。そして、体を動かしてほしいです。震災の悲しみはなくなるとおもいますが、まずは動いてほしいのです。

「遠野まごころネット」のボランティアの方々が「足湯隊（あしゆたい）」をつくって、被災者の方々に足湯に浸かってもらったところ、被災者の方々の心もほどけてきて、少しずつ本音を話してくれるようになった、というのは、とても素敵なお話だと思いました。

東北の方はおっしゃいます。

「観光でも大歓迎です。とにかく東北に足を運んでください」

次は、あなたのご参加をお待ちしております。